

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和元年6月18日現在

機関番号：34307

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K17234

研究課題名(和文) 父親の家庭・地域参画の促進を意図した家族参加型子育て支援プログラムの開発

研究課題名(英文) Developing a family Participation-based Parenting Support Program to Promote Fathers' Participation in their Family and in Community

研究代表者

松本 しのぶ (MATSUMOTO, Shinobu)

京都光華女子大学・こども教育学部・講師

研究者番号：90390210

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、父親の家庭・地域への参画を意図して、乳児期の父親の子育て関与を促進し、地域内で父親同士が継続的に子育てを支え合う関係を形成するための子育て支援プログラムを開発することである。具体的には、(1)第1子が乳児期の両親とその子どもで参加するプログラムの作成・実施、(2)参加者への質問紙調査とインタビュー調査の2点を行った。その結果、プログラム受講により、父親の育児への関心が高まること、多くの父親同士の交流が継続していることが明らかとなった。よって、父親の子育てへの関与の促進、地域内での父親同士が子育てを支え合う関係形成について、プログラムの効果が示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の成果は、父親の家庭・地域への参画を意図した子育て支援プログラムを構築できたことである。これは、少子化対策や虐待防止の視点から、父親の育児関与が求められている現在の社会的ニーズを満たす具体的な一つの方法を提示することができたといえ、社会的意義が大きい。また、プログラムを開発・実施・評価する過程のなかで得られたデータは、男女共同参画社会を形成するために今後必要な支援を考えるうえで学術的資料価値があるといえる。

研究成果の概要(英文)：This study aimed at developing a program to encourage fathers' involvement in parenting infants and to facilitate relationships wherein fathers within a community continue to support one another with regard to parenting, so as to promote their participation in the family and in community. The study had two components: (1) development and implementation of a program wherein both the parents of a first child participated along with the child and (2) a questionnaire and interview survey with the participants. The results indicated that fathers' interest in parenting increased because of the program and that many of the participating fathers have maintained relationships with one another since the program. Thus, the study confirmed the program's efficacy in terms of promoting fathers' involvement in parenting and facilitating relationships wherein fathers within a local community support one another in terms of parenting

研究分野：社会福祉学

キーワード：子育て支援 父親 プログラム 家族 ネットワーク

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

近年、少子化対策や虐待防止、また男女共同参画の視点から男性を対象とした子育て支援が重視されている。たとえば、2004年の「少子化社会対策大綱」以降、家族を包括的に支援する施策が必要であるとされ、2010年には父親の育児に関する意識改革、啓発普及を意図した「イクメンプロジェクト」が開始されるなど、国をあげて具体的な施策を行っている。また、同じく2010年に発表された「第3次男女共同参画基本計画」では、男性が家庭での育児や介護、地域活動等に参画できる環境整備の推進が示されている。このような社会状況のなかで、父親の家庭・地域への参画を意図した子育て支援の具体的な取り組みを検討することは、現在の社会的ニーズおよび国が取り組むべき最重要課題に合致した今日の研究テーマであるといえる。また、政策として男性の育児が推進されるなかで、各地で父親を対象とした子育て支援プログラムが取り組まれている。実際に子育て支援プログラムに参加した父親の変容を把握することは、父親に対するより効果的な支援を考えるうえで重要である。

2. 研究の目的

これまで研究代表者は、父親の子育てへの関与の促進および父親同士のネットワーク形成を意図した子育て支援について研究を行ってきた。なかでも、2011～2012年度には、父親対象の子育て支援プログラム「パパセミナー 赤ちゃんと遊ぼう！」(以下、「パパセミナー」と略す)の参加者を対象とした質問紙調査およびインタビュー調査を実施した。その質問紙調査の結果から、「パパセミナー」のプログラム内容は、父親の育児スキルや育児への関心を高めること、「子育てを支え合う地域のつながり」の必要性を感じる意識が高まるという効果があること、その一方で、実際にはプログラム終了後に参加者同士継続した関係を築いている父親はほばいないことなどが明らかとなった¹⁾。

また、グループインタビュー調査では、父親同士の交流促進を支援するためには、父親同士が何度も顔を合わせる機会が必要であり、繰り返し父親同士が集う講座や行事を実施することが重要である。父親同士だけでは主体的な交流をするまでに時間がかかること、母親同士のほうが比較的主体的な交流へと展開しやすいことから、父親のみをターゲットとせず家族ぐるみの交流をねらいとした夫婦・家族で参加する講座・行事等を開催することが必要であるなどの結果を得た²⁾。

上記の結果から、これまでの「パパセミナー」のプログラム内容を基盤としながら、さらにプログラム終了後に父親が継続的に参加者同士でのつながりを持つことを重視した子育て支援プログラムを構築することが必要であると考えた。そのためには、父親だけではなく配偶者と子どもを含めた家族同士が参加する子育て支援プログラムの構築が必要である。

そこで、本研究の目的は、父親の家庭・地域への参画を意図した「家族参加型子育て支援プログラム」の開発を行うことである。具体的には、乳児のいる父親の子育てへの関与を促進し、特に父親同士が継続的に子育てを支え合う関係を形成できるプログラム内容を検討する。なお、本プログラムの特徴は、配偶者および子どもと共に父親が参加する形式とすることである。また、プログラムの参加夫婦に対する質問紙調査およびインタビュー調査からプログラムの効果を検証する。

3. 研究の方法

(1) プログラム作成・実施について

本研究では、これまで研究代表者が実施した調査結果を再解析し、「パパセミナー」のプログラム内容に不足しているものについて検討した。さらに、子育て支援の実践者および研究者からの意見をふまえて、後述する「家族参加型子育て支援プログラム」を作成した。そして、2016年度にA県内の3つの市で参加家族を各10組程度募集し、各市において全5回からなる「家族参加型子育て支援プログラム」を実施した。

(2) 評価について

質問紙調査

各市で実施したプログラムに参加した計28組の夫婦に対して、2016年度にプログラム実施前、実施中、実施後の計3回の自記式質問紙調査を行った。調査方法および調査時期等は、後述する。

倫理的配慮としては、調査の趣旨、個人情報保護、調査協力が強制ではないことを参加者に口頭で説明し、同意を得た場合のみ調査票を配付した。また、上記と同様の内容を記した依頼文を調査票に同封し、調査票の提出・返送により調査への同意が得られたと判断した。

インタビュー調査

各市のプログラムの参加者のうち、インタビュー調査への協力意思を示した夫婦6組(3地域、各2組)を対象に半構造化面接でのインタビューを2018年9月～2019年2月に実施した。夫、妻、それぞれ単独で1時間程度、質問項目は、プログラム参加の動機、受講後の変化、現在の参加者同士の交流状況等についてである。インタビュー内容については、逐語録に起こし、分析した。倫理的配慮としては、調査の趣旨、個人情報保護、調査協力が強制ではないこと、インタビュー内容は録音し、逐語録にして分析すること等について、対象者に文書と口頭で説

明し、同意書に署名を得た。

4. 研究成果

(1) 作成したプログラム

これまで実施していた「パパセミナー」は、同じ市町村に住む第1子が生後2ヶ月～12か月の父親とその子ども10組程度を対象とし、隔週週末に3回連続講座を行っていた。3回連続講座の主な内容は、父親と子どもの親子遊び体験など子どもとの具体的ななかかわり方を実践的に学ぶとともに、子育てや夫婦の関係などに関する参加者同士の語り合いを行い、父親同士の交流を深めようと働きかけていた。しかし、プログラム終了後に参加者同士継続した関係を築いている父親はほぼいなかった。そのため、今回作成した「家族参加型子育て支援プログラム」では、以下の2点を新たに組み込んだ

第一に、父親だけでなく、母親も必ず一緒に参加する形態とする。3回連続講座の際は、母親は父子とは別室で母親同士の座談会等を行うこととした。この目的は、子育ての悩みや喜びを参加者同士で話し合うことを通じて母親同士が継続的に交流する契機を提供すること、また、母親が子育てを通じた配偶者との関わりについて考える機会を設けることである。特に、母親同士の交流が家族同士の交流につながることを期待して設定した。

第二に、3回連続講座終了後およそ1か月半後とその3か月後に「交流会」と称するプログラムを追加する。「交流会」の主な内容は、父親・母親別での語り合い、父親と子どももしくは母親と子どもによる親子遊び、全家族一緒に行う集団遊び等である。これは、3回連続講座だけではその後の父親同士の交流につながりにくいことがわかったため、期間を少し空けて顔を合わせる機会を設けること、また全家族で集団遊びを行うことで家族ぐるみで交流していく体験をすることを目的に設定した。

プログラムの概要は、以下の表1に示した。

表1 家族参加型子育て支援プログラムの概要

目的	【父親】 月齢・発達に応じた子どもとの遊び方を学ぶ 子育てや配偶者との関係、仕事を含めた自分の生活のあり方などを振り返る機会をもつ 地域における父親同士・家族同士のつながりをつくる	【母親】 子育ての悩みや喜びを参加者同士で話し合うことを通じて子育て不安をやわらげる 子育てや配偶者との関係、自分の生活のあり方などを振り返る機会をもつ 地域における母親同士・家族同士のつながりをつくる
対象	開催会場のある市町村に居住する第1子が2ヶ月～概ね12ヶ月の両親とその子ども、10組程度	
日時	原則、土曜日か日曜日の午前中に1回90分、隔週全3回の講座。 講座終了後、およそ1か月半後とその3か月後、計2回の交流会を実施。	
場所	参加者の居住地域(市町村)にある子育て支援センターや公民館 など	
講座内容	【父親】 父親と子どもで参加し、以下のプログラムを実施する。 1回目：あやしあそびの紹介・実践 2回目：父親の身体を使った親子遊びの紹介・実践 3回目：簡単な手作りおもちゃの紹介・作成 すべての回で、アイスブレイクゲームや座談会を盛り込んで父親同士の交流の機会を持つ。	【母親】 父親・子どもとは別室で母親同士の座談会を行う。 座談会のテーマは、 ・妊娠・出産や育児について ・夫との関係について など
交流会内容	【父親】 1回目：父親のみの座談会 講座終了後の変化の確認 など 2回目：子どもと一緒に父親同士の座談会 家族の集団遊び など	【母親】 1回目：子どもとのふれあい遊び 講座終了後の変化の確認 など 2回目：母親のみの座談会 家族の集団遊び など
支援者	原則、【父親】の講座・交流会には、進行役のファシリテーターが1名、父親のサポート等を行う副ファシリテーターが1名入る。【母親】の講座・交流会にも、進行役のファシリテーターが1名入る。	

(2) 質問紙調査の結果

プログラムの“講座参加前”、“講座終了後”、“交流会終了後”の計3回、質問紙調査を行った。調査方法、回収数等は、以下のとおりである。

プログラム実施前（講座参加前）

郵送配付・持参回収

2016年5月10日～29日（回収数 母親：28名／父親：28名）

プログラム実施中（講座終了後）

手渡しもしくは郵送配付・郵送回収

2016年6月18日～7月17日（回収数 母親：24名／父親：23名）

プログラム終了後（交流会終了後）

郵送配付・郵送回収

2017年2月22日～3月12日（回収数 母親：14名/父親：11名）

質問紙調査の結果として、第一に、父親自身に“講座参加前”と“講座終了後”の変化を聞いたところ、特に変化が見られたものとして、「子どもとかかわりたい気持ちが強まった」、「母親に対して、仕事、家事、子育てをねぎらう気持ちが強まった」、「子どものことについて、母親と話す頻度または時間が増えた」、「母親に対して、仕事、家事、子育てをねぎらう言動が増えた」があげられ（表2）、子どもや配偶者に対する思いが強まったことがわかった。

表2 父親の講座受講前と受講後の変化

	合計	とてもあてはまる	まああてはまる	変化なし	あまりあてはまらない	全くあてはまらない	無回答	得点
子どもとかかわりたい気持ちが強まった	23名	12名	8名	3名	0名	0名	0名	1.39点
母親に対して、仕事、家事、子育てをねぎらう気持ちが強まった	23名	10名	10名	3名	0名	0名	0名	1.30点
子どものことについて、母親と話す頻度または時間が増えた	23名	8名	9名	6名	0名	0名	0名	1.09点
母親に対して、仕事、家事、子育てをねぎらう言動が増えた	23名	8名	9名	6名	0名	0名	0名	1.09点

得点：「とてもあてはまる」= 2点、「まああてはまる」= 1点、「変化なし」= 0点、

「あまりあてはまらない」= - 1点、「全くあてはまらない」= - 2点の計を「合計」から「無回答」を除いた数で除算

第二に、同じ市に住む父親同士の交流の必要性について聞いたところ、その必要度は、父親は、“講座参加前”は0.75点であったが、“交流会終了後”は1.18点と増加している。母親は、“講座参加前”は1.07点であったが、“交流会終了後”は1.50点となり、やはり増えている（表3）。つまり、夫婦ともにプログラム参加することで、地域での父親同士の交流が必要であるという意識が高まったといえる。

表3 同じ市に住む父親同士の交流の必要性

		合計	とてもそう思う	まあそう思う	あまりそう思わない	全くそう思わない	無回答	必要度
父親	講座参加前	28名	7名	15名	4名	2名	0名	0.75点
	交流会終了後	11名	6名	3名	2名	0名	0名	1.18点
母親	講座参加前	28名	10名	14名	4名	0名	0名	1.07点
	交流会終了後	14名	7名	7名	0名	0名	0名	1.50点

必要度：「とてもそう思う」= 2点、「まあそう思う」= 1点、「あまりそう思わない」= - 1点、

「全くそう思わない」= - 2点の計を「合計」から「無回答」を除いた数で除算

第三に、交流会終了後の本講座参加者との母親を伴わない父親の交流状況については、「している」が14名中8名（72.7%）であり、具体的には、「父親のみの食事会・飲み会」や「メールやLINE等のやりとり」を行っていることがわかった。

第四に、同じ市で家族ぐるみでつきあっている子育て家庭の数については、母親は、“講座参加前”は「3家族以上」が4名（14.3%）であったが、“交流会終了後”は12名（85.7%）と大きく増えている。また、「全くない」は“講座参加前”は18名（64.3%）であったが、“交流会終了後”は1名（7.1%）と大きく減っている。父親は、“講座参加前”は「3家族以上」が1名（3.6%）であったが、“交流会終了後”は5名（45.5%）と増えている。また、「全くない」は“講座参加前”は18名（64.3%）であったが、“交流会終了後”は4名（36.4%）となっている。この結果から、プログラム参加後は家族ぐるみの交流が盛んになっていることが明らかとなった。

以上の調査結果から、家族参加型のプログラムにおいても、父親の子育てへの関心が高まり、父親同士の交流に対する意欲も向上することがわかった。また、従来の「パパセミナー」プログラムではほぼ見られなかった父親同士の交流が今回の「家族参加型子育て支援プログラム」では見られること、加えて、家族ぐるみの交流がプログラム終了後に活発になっていることが

明らかとなった。

(3) インタビュー調査の結果

インタビュー調査の結果、以下3点が明らかとなった

1点目は、プログラム参加の動機として、子育てに関する情報が欲しいといったニーズも高いが、夫婦ともに自分自身が「パパ友」、「ママ友」を作りたい、または、配偶者に「ママ友」、「パパ友」を作ってもらいたい、という思いがあることである。特に、現在の居住地が出身地ではない場合、地域にも友達がほしいという思いは夫婦ともに強い。特に、父親には、母親が息抜きできるような、子育ての悩みや相談できる仲間がいるといいのではないかという思いがあり、それが父親自身の「家族参加型子育て支援プログラム」に参加する動機のひとつとなることがわかった。

2点目は、プログラムへの参加後、地域のなかで父親同士が継続的に交流するためには、参加者たちが集まる機会や場が必要だということである。どの地域の夫婦も、プログラム終了後に子ども連れで行けるイベントや地域で集まることができる場所を求めている。その機会や場は、プログラム参加者に限定して提供されるものではなく、地域で行われるお祭りや市町村全体を対象とした子育てイベント、土日に利用できる遊び場などを想定しており、お互いに誘い合って気軽に出かけられる機会や場所が近くにあれば、より交流が進むということがわかった。

3点目に、継続的に交流を続けていくためのツールとして、スマートフォンアプリの活用なども取り入れていくことである。各地域の参加者間でスマートフォンアプリ「LINE」のグループが作られ、連絡手段や情報交換の場として利用されていた。子育て支援プログラムが1回で終わらない継続的なものである場合、次回も同じ人たちと会うという前提があるため、LINEのID交換をお互いに言い出しやすい。父親、母親ともに、電話やメールよりもLINEはメッセージを気軽に送り合えるものであると考えている。さらに、そのLINEグループの中で、イベント参加を呼び掛けるようなリーダーシップを発揮してくれる人がいたり、メッセージを送るとすぐに反応してくれる人がいたりすると、実際に会う機会につながり、より交流が活発になることが明らかとなった。

(4) まとめ

本研究では、父親の家庭・地域への参画を意図した「家族参加型子育て支援プログラム」の開発を行った。プログラムを実施し、質問紙調査の結果から、本プログラムに参加することによって、父親の育児への関心や父親同士の交流意欲が高まるだけでなく、実際に父親同士や家族ぐるみの交流が続く可能性が高いことがわかった。また、インタビュー調査の結果から、「パパ友」が欲しいと考えている父親だけではなく、配偶者のために他の家族と交流しようとする動機で参加する父親もいることが明らかになった。これは、「家族」で参加するこのプログラムの特徴であるといえる。さらに、地域のイベント開催やスマートフォンのアプリ活用など、継続的な交流を側面的に支援していく方法を今後検討していくための貴重な意見が得られた。

最後に、本研究にご協力いただいた皆様にこの場を借りて感謝申し上げます。

引用文献

1) 松本しのぶ(2014) 父親を対象とした地域子育て支援プログラムの効果と課題 参加者に対する質問紙調査から、佛教福祉学(23)、種智院大学仏教福祉学会。

2) 松本しのぶ(2016) 地域における父親同士の交流を促進する支援 子育て支援プログラム参加者に対するグループインタビュー調査から、京都光華女子大学・京都光華女子大学短期大学部研究紀要(54)。

5. 主な発表論文等

[学会発表](計2件)

(1) 松本しのぶ、家族参加型子育て支援プログラムの開発と評価、日本保育学会第72回大会(東京都・大妻女子大学)、2019。

(2) 松本しのぶ、家族参加型子育て支援プログラムの検討 参加夫婦の実態から、日本保育学会第70回大会(岡山県・川崎医療福祉大学)、2017。

[図書](計1件)

(1) 小崎恭弘・田辺昌吾・松本しのぶ 編著、別冊発達(33) 家族・働き方・社会を変える父親への子育て支援 少子化対策の切り札、ミネルヴァ書房、2017、227。

[その他]

(1) 自主シンポジウム

小崎恭弘・田辺昌吾・松本しのぶ 企画、父親を支える子育て支援社会の構築 - ポストイクメン時代へのアプローチ -、日本保育学会第71回大会(宮城県・宮城学院女子大学)、2018。

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。